

高尾山 歴史の散歩道 49

明治大学博物館 外山 徹

宝篋印塔

大本坊から踵を返し、大本堂へ続く石の階段を戻る。大本堂の脇から飯縄権現社へ登る。石段の登り口には、かつては二ノ鳥居が立っていた。現在の鳥居は石段を登り切ったところに立っているが、

この鳥居のことについては、またあらためて言及してみたい。

宝篋印塔

階段の登り口正面の踊り場には、飯縄大権現の石像が祀られている。小



宝篋印塔 江戸期の希少な金銅製の造作物

祠の前で右へ向き直ると、さらに右手に緑青を吹いた金銅製の宝篋印塔が視界に入る。金銅製の造作物については、先に唐銅五重塔に触れたが、この塔は宝暦八年(一七五八)に建立されたもので、現在は大本堂の大きな屋根に隠れるように目立たない佇まいであるが、薬王院の寺勢の興隆を見届けてきた稀少な塔である。

宝篋印塔とは宝篋印陀羅尼の納経を名の由来とし、江戸期には寺院境内

に盛んに建立されていた。郊外の寺院を巡ると、石造の宝篋印塔をよく目にする事ができる。元来、滅罪供養塔であったが、江戸期には現当二世の安楽を祈願する趣旨で悪疫除などを目的に建立されている。

実はこの塔については、江戸期の地誌類においても『新編武蔵風土記稿』(文政五年・一八二二)多磨郡之部「上梓」がその存在を記すくらいで、紀行文にも描写を見ることができない。寛政(一七八九〜一八〇一)末年に建立された五重塔が例外なく取り上げられているに較べ、その陰に隠れて忘れられた塔とも言えそう。残念ながら五重塔は度重なる被災によって失われたが、この宝篋印塔は二百五十八年の風雪を経て、今日、参拝に訪れる信徒を見守っているのである。

香炉など夥しい数の金銅製の造作物のある記事を見付けたことがある。それらは、おそらく参詣の講中などによって奉納されたものだろう。石造物が林立する様は今日本にユラーな風景であるが、金銅製の造作物の林立には意外な感があるものの、第二次大戦に際し、歴史的な価値を認められたものの外は金属供出によって回収されてしまったという経緯がある。そのため、残存する金銅製の造作物は稀少である。

江戸期の旅日記を読むと、庶民参詣の盛んな寺院の境内には鳥居や燈籠

高尾山の宝篋印塔は、武蔵国荏原郡用賀村(東京都世田谷区)の飯田利恭という人物が施主となり、神田の鋳物師多川民部の作である。塔の銘文には、先の山主秀憲が高尾山内に塔が無いゆえ建立を発願した旨が記されている。秀憲から秀興に山主の座が譲られたのは寛延三年(一七五〇)と宝暦三年(一七五三)という二つの記事があるが、秀憲は飯縄権現社の建立をはじめ享

保期(一七一一〜一七三六)における寺勢の拡張を担い、続いて元文三年(一七三八)には最初の江戸出開帳、寛延年間には高尾山縁起の作成、など出色の事跡を残す。中興俊源、寛永の再興の秀秀に続いて第三の中興を担った傑物と言えよう。

宝天期の高尾山

高尾山最寄りの上栢田村旧家の日記には、高尾山の動静に関する記事が見られ、この稿でもたびたび取り上げてきた。その日記が残り始める享保期から、高尾山に多くの参詣者が訪れている旨の記事が見られるようになる。そして、同様の記事は宝暦以降、コンスタントに記されるようになる。

宝暦五年三月十五日「高尾開帳参詣たくさん、同じく三月二日「おびただしき高尾参り」、さらに四月八日にも「夥しき高尾参り」。以降、七年・九年に二回ずつ、明和四年(一七六七)、安永二年(一七七三)、三年が一回ずつ、同六年は二回、天明四年(一七八四)、同六年から寛政二年(一七九〇)まで毎年一度ずつという具合に、近代まで書き継がれた日記の中においても、この一八世紀後半の時期に集中的に見られる記載である。これは日記の主が高尾山への関与の度合いを深めていったことを示すとともに、また、高尾山への参詣者の顕著な増加が印象深いものであったという点であろう。

日記は高尾山内で執行された諸行事についても記す。先述の「参詣たくさん」とあった宝暦五年二月一五日からは「飯縄・薬師へ開帳はじめ」とあり、この四月二八日

まで続く居開帳の期間中の三月には、二月に開創された清滝の記念碑が建立されている。その相乗効果で大勢の参詣者が集まったことは想像に難くない。七年二月二八日には「この日より高尾山二十万枚護摩はじまり」、三月五日まで続き、翌月八日からは再び居開帳が執行されるなど、人々を参詣に誘う出来事が相次いだ。宝篋印塔の建立がこの翌年である。

明和四年四月には「高尾山太々神楽開帳つかまつる」、安永二年一二月には「高尾山へ石燈籠納め大身なり」、同六年九月には「高尾山勸請御練りあり」と、この頃にはさまざまなる種類の行事が相次いで執行されていたことをうかがわせる。

長にも表れている。薬王院文書の中の「永代日護摩家名記」という檀家帳に記された人数の伸びは、元禄一七年(一七〇四)以来、江戸からは地元八王子市域、ついであきる野・青梅市域に伸長する。宝暦の頃からこれらエリアから外縁部に向かってぐんと面的な拡がりを見せることになる。東方は日野、府中多摩市域といった多摩川沿いの村々、北方へは飯能、狭山、入間市域といった埼玉県中部に新たな護摩檀家の増加が顕著となる。さらに、安永末から天明にかけては西方へ山梨県都留市域まで檀家が分布する。

護摩札配札の規模という点では一九世紀段階に較べてまだまだ数量的に少ないものの(永代檀家ということになると富裕層に限られるであろうし)、範囲としては関東平野の西半分と甲斐国東部地域という、江戸後期

における高尾山信仰圏がおおよそ形づくられたのがこの宝暦から天明の時期と言いうことになる。先の旧家の日記には宝暦九年三月一七日のページに此日より五日之内高尾山ほうきやうとうきょう(供養)有と記されている。今は緑青を吹いて古色を帯びた宝篋印塔も、鏝上がった直後は金色をしていたはずである。奉納に際しては晴れやかな供養がおこなわれたようだ。その場では、高尾山主秀興が導師を勤め、隠居秀憲の姿もあつたに違いない。高尾山信仰隆盛の未来が予感される時期金色に光り輝く塔を目前にして集まった僧俗の胸に去来する思いはいかばかりであったろうか。

おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。《参考文献》 縣敏夫「高尾山の記念碑・石仏」(高尾山薬王院二〇〇七)